右房内巨大血栓を認めた肺血栓塞栓症の一例

◎小島 光司[1)]、林 美月[1)]、井上 美奈[1)]、左右田 昌彦[1)]、黒川 英輝[2)]、髙田 康信[2)]
JA 愛知厚生連江南厚生病院 診療協同部 臨床検査室[1)]、JA 愛知厚生連江南厚生病院 循環器内科[2)]

【はじめに】
右心内血栓を伴う肺血栓塞栓症（PTE）は予後不良であり，早期診断および治療が重要である。今回，右房内巨大血栓を伴う PTE の早期診断・治療に超音波検査が貢献できた症例を経験したので報告する。

【症例】
患者は 80 代，男性。既往歴に胃潰瘍，脳梗塞，高血圧，高脂血症を有する。202X 年に労作時呼吸苦，易疲労感を主訴に他院より紹介受診され，精査目的に心電図および心臓超音波検査（UCG）を施行した。

【血液検査所見】
CRP 11.87 mg/dL，LDH 264 U/L，ALP 132 U/L，
BNP 641.3 pg/mL。その他特記所見なし。

【心電図所見】
心拍数 58 bpm，電気軸は正軸，時計方向回転を呈する。
Ⅲ誘導に Q 波，下壁誘導および前胸部誘導に陰性 T 波を認める。

【UCG 所見】
左室収縮能は良好，軽度左室圧排像を認める。右房内に右房と右室と行き来する 90 mm の紐状の可動性腫瘤を認める。腫瘤は心房中隔を介して左房へ突出しており，卵円孔への陥入を疑う。右室拡大および McConnell 徴候を認める。

【経過】
右房内血栓を伴う PTE と判断し主治医へ緊急報告を行い，追加検査の実施を提案した。同日施行された下肢静脈エコーおよび造影 CT 検査にて，左膝窩～下腿静脈および両側肺動脈に血栓を認め，急性肺塞栓症と診断された。抗凝固療法を開始後に右房血栓は縮小し，現在経過観察中である。

【まとめ】
本症例は卵円孔に血栓が陥入しており，切迫奇異性塞栓と呼ばれる状態であったことから迅速な対応が重要であった。今回，UCG 所見の緊急報告ならびに追加検査の提案が早期診断・治療へ繋がった。緊急性の高い所見を認めた場合は緊急報告や追加検査提案などの検査室からの情報発信が有用であると考える。

連絡先：0587-51-3333